

つくり  
育てる漁業  
人と技術の  
ネットワーク

# ACN REPORT

特定  
非営利  
活動法人

ACNレポート  
第38号

2013年1月30日発行  
(毎年2回1月・9月発行)

編集/NPO法人ACN事務局  
発行人/田嶋猛(NPO法人ACN代表)  
発行所/NPO法人アQUALチャーネットワーク  
〒833-0056 福岡県筑後市久高1343番地  
ACN事務局/クローラ工業株式会社  
生産本部 技術特販部内  
TEL.0942-52-1261  
FAX.0942-51-7203

NO.38 2013.JAN.  
AQUACULTURE NETWORK

## 1. 新年の挨拶

NPO法人 ACN 理事長 田嶋 猛

## 2. ACN 養殖用種苗生産速報

NPO法人 ACN

## 3. 養殖・販売概況

NPO法人 ACN

## 4. 新入社員紹介

太平洋貿易株式会社 手島 高廣・和田 裕一

## 5. 絶滅危惧種ヒナモロコの保護活動

NPO法人 ヒナモロコ郷づくりの会 事務局 大石 敏

## 6. ACN 懇話会開催予定

2013年  
年頭のご挨拶

## 平成25年 後継者が希望の持てる年に!!

(アQUALチャーネットワーク)

NPO法人 ACN 理事長 田嶋 猛



明けましておめでとうございます。  
読者の皆様方には平素よりNPO法人ACNの活動にご理解  
とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

ACNは、平成2年(1990)10月に、水産増養殖の最新技  
術の勉強及び情報交換を目的とする任意団体として発足しま  
した。そして、平成15年(2003)3月に、福岡県からNPO  
法人の認可を受け本年で10周年になります。十年一昔とい  
いますが、私たちが関連する水産業、特に魚類養殖業はどの  
ように推移したのでしょうか。

農林水産省の統計情報(東日本大震災で失われたデータが  
あるため震災前までの資料)によれば、平成13年から平成22  
年までの10年間で、漁業・養殖業における漁業就労者数は25.2  
万人から27%減少し18.4万人、生産額は17,803億円から17%  
減少し14,826億円、生産量は612.6万トンから13%減少し531.2  
万トンとなっています。

ACN会員の係わりの深い養殖業のうち、魚介類全体の海  
面養殖は生産額で5,029億円から15%減少し4,284億円、生産  
量では125.6万トンから11%減少し111.1万トンになりました。  
同様に内水面養殖では生産量が55.7千トンから30%減少の39.4  
千トンになったものの、ウナギ価格が2倍に上昇したため、生  
産額が472.2億円から602.4億円と27%増加しました。

海面養殖での魚類に注目すると、生産量の大きな減少は見  
られませんでした。魚種別にはかなりの変化がみられます。  
生産量順に見てみますと、約60%を占めるブリ類は15万トン  
前後で推移し、生産額も魚価の上げ下げはあったものの115億  
円を維持して来ました。しかし、ブリ価格が平成23年後半か

ら現在に至るまで、生産原価割れの500円/kgという大暴落の  
継続で生産者の経営状況は予断を許さないものになっていま  
す。マダイは平成15年の83千トンピークとして平成22年  
には19%減少し67.6千トンになりました。価格は2~3年周期に  
500円/kg~800円/kgを上下し、このところ高値圏の800円/kg  
で推移しています。ギンザケは、生産と流通が一体となった  
販売努力で、海面養殖では唯一生産量と価格が上昇した魚種  
でしたが、東日本大震災で壊滅的な被害を受け、これまで営々  
と構築した販売マーケットも輸入物に入れ替わっています。  
トラフグの生産量は平成13年の5.8千トンから平成16年の4.3  
千トンと、この3年間で一気に25%減少しましたが、その後  
は横ばい状態です。価格は、中国からの輸入の影響で下落し  
平成17年には一時1,500円/kgを切る場面もありましたが、輸  
入の減少に伴って上昇し平成23年には2,500円/kgになりま  
した。ヒラメの生産量は、韓国からの輸入の影響で平成13年の  
6.6千トンから平成22年までに40%減少し、4.0千トンとな  
りました。その後もクドア問題等で市場も縮小しており、さら  
なる生産量の減少が懸念されます。価格は平成13年の2,000円/  
kgから下落がつづき平成22年にはキロ当たり1,000円まで下が  
りましたが、その後は1,100~1,500円/kgで推移しています。

以上、この10年間で振り返ってみると水産業界の現実の厳し  
さをひしひしと感じますが、日本の株式市場は3年ぶりの政権交代を  
歓迎したかのように昨年末から年初にかけて急上昇しました。過去  
2年間、日本には震災や外交問題等で辛いことが多過ぎましたの  
で、今年こそ明るい日本となって、水産業界の後継者にとって希  
望の持てる年になることを切に願っております。

## ■ 海面養殖業 魚種別収穫量

(農林水産省HP 統計データ)  
単位:トン

注:平成23年は、東日本大震災の影響により、消失したデータは含  
まない数値

備考:ブリ類 ブリ、カンパチ その他

年次	ギンザケ	ブリ類	マアジ	シマアジ	マダイ	ヒラメ	フグ類	その他	魚類計
H13(2001)	11,616	153,075	3,308	3,396	71,996	6,638	5,769	7,991	263,789
H14(2002)	8,023	162,496	3,462	2,931	71,754	6,221	5,231	8,287	268,405
H15(2003)	9,208	157,568	3,377	2,313	83,002	5,940	4,461	8,049	273,918
H16(2004)	9,607	150,068	2,458	2,668	80,959	5,241	4,329	6,951	262,281
H17(2005)	12,729	159,741	2,329	2,738	76,082	4,591	4,582	6,129	268,921
H18(2006)	12,046	155,004	1,977	3,300	71,141	4,613	4,371	5,930	258,382
H19(2007)	13,567	159,749	1,773	3,211	66,663	4,592	4,230	8,289	262,074
H20(2008)	12,809	155,108	1,695	2,638	71,588	4,164	4,138	7,991	260,131
H21(2009)	15,770	154,943	1,682	2,522	70,959	4,654	4,680	9,557	264,767
H22(2010)	14,766	138,936	1,471	2,795	67,607	3,977	4,410	11,751	245,713
H23(2011)	116	146,240	1,094	3,082	61,186	3,475	3,724	11,685	230,602

## 1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

2012年度の夏越し種苗は、昨年9月時点で1,277万尾と推計したが、実際には985万尾（前年度792万尾24.3%増）の在池尾数であった。成魚価格の高値での推移や品薄状況に加えて、愛媛県でのエピテリオシスチス症や類結節症の発生、それに続く赤潮による斃死後の補填等で種苗の需要は強く、年末まで860万尾が出荷された模様である。成魚価格の堅調さの反面、種苗の浜値は7～8円/cmと依然として安値水準である。

ブリからマダイへの魚種転換など、養殖業者の高い導入意欲を反映し中堅種苗生産者は久しぶりに増産方針を採っており、**山崎技研、近畿大学、ヨンキウ**など22社は昨シーズンより約50%増の5,750万尾の出荷予定で生産中である。仮に計画通りとなった場合、年間出荷尾数は6,610万尾（前年5,313万尾24%増）と大幅に増加することになるが、これからの景気上昇による外食市場の伸長で、この3年間堅調に推移した成魚価格が今後も継続することに期待したい。

## 2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2012年9月～12月の種苗生産数は昨年同様**近畿大学**だけの20万尾で、年内15万尾を出荷し残りは1月出荷予定である。別途、年内採卵で4月に全長10cmで出荷する種苗も約30万尾の需要がある。これらの早期種苗は、導入後12ヶ月で800g/尾での出荷を目指しており、生産量は少ないものの加温設備を持つ陸上養殖場や海面養殖でも飼育条件が合う養殖業者には根強い人気がある。

年末までに採卵した種苗生産者は近畿大学も含めて3社だけで、一般的には12月から親魚を仕立て1月中旬以降に採卵、3月下旬～4月上旬沖出しが主流で、海水加温のコスト高になる低水温時の生産は少ない。

昨シーズンは、養殖業者からの種苗注文は早く、1月末には注文を辞退するような状況であった。今シーズンは、東京都の身欠フグ解禁での消費拡大を期待して10月は好調な出だしたが、その後は総選挙

期間中の宴会自粛や中国産の輸入も加わり、11月～12月には価格が下落した。年末には若干戻したものの、このような状況を反映して養殖場での越年在池が多く、養殖業者からの種苗注文は昨シーズンより低調である。

ヒラメ陸上養殖場でのトラフグ養殖尾数は、ヒラメの生残率が依然低いため増加すると思われるが、昨年の高水温での餌止でヒラメの成長が遅れており、トラフグ種苗の導入は遅れそうである。また、ヒラメの代替でカワハギも養殖されているが、種苗供給の不安定さや生残率の低さもあるため急増はしないと思われる。

また、2012年は全雄生産技術の発表が相次いだが、2013年は数社がコスト、成長、市場の評価などを確認するための試験生産に入るものと思われる。

## 3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

2012年9月～12月の養殖用種苗は**マリンテック、まる阿水産**など民間7社で生産され、出荷尾数は昨シーズンより48万尾増加の180万尾であった。出荷サイズ及び浜値は昨シーズン同様の8～9cmで90円/尾であった。年内出荷の早期種苗増加の要因としては、数年来続く新型レンサ球菌症、エドワジェラ・タルダ症やそれらの合併症が発症する7月～9月に入る前に、

成魚出荷の終了を目指す養殖業者が増加したためである。この傾向は主産地の大分県で強い。愛媛県では3月～4月の種苗導入業者も依然としてあるが、前述のような養殖期間では、出荷サイズは600～800g/尾と小さく、1尾当たりの単価は安いため、ヒラメ養殖経営は苦しくなっている。したがって、韓国産ヒラメがやや敬遠され国産需要は高まったものの、

クドア問題や不景気で縮小した市場の回復には時間が必要であり、今シーズンもヒラメ種苗の減少傾向は続くものと推測される。なお、前述のトラフグ種苗の項目で述べたように、ヒラメ陸上養殖場へ代替

として導入されるカワハギ稚魚には国産以外に輸入種苗もあるとのことで、防疫面を考慮すれば国産種苗の導入が望まれるところである。

## 4. シマアジ 縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵縞鯵

2012年の成魚価格が採算ラインを十分確保できるところまで上昇したことから、養殖業者の種苗導入意欲は高く、需要は増加するものと思われる。しかしながら、**近畿大学、山崎技研**など4社の種苗出荷予定尾数は前年並みの260万尾であり、種苗の不足が懸

念される。このような状況下での今シーズンの種苗の浜値の動向に注目したい。因みに2012年は150~170円/尾（8cm up、ワクチン接種なし）であった。

文中社名敬称略

# 養殖・販売概況 2012年1月 ACN

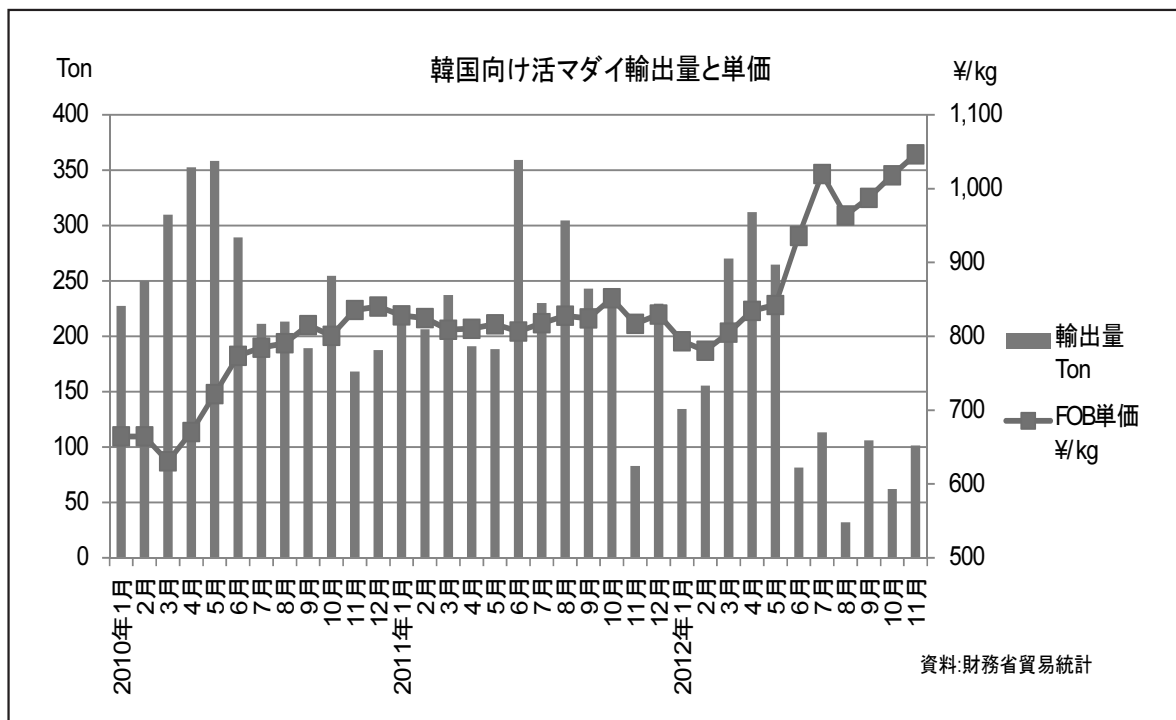
## 1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

2011年末、2kg/尾を中心とした引き合いが強く、順調な売れが2012年の春先まで続いた。そのため成長が追いつかず、1.5kg/尾upの先取りが多発したため、極度の荷薄状態となった。

は愛媛県で赤潮による大量斃死および給餌制限が見受けられた。さらに海水温も30℃を越え、給餌制限のため成長の遅れに拍車をかける状態となった。

成育面では、春季にビブリオ病や白点病、夏季に

成魚価格は、年明け750円/kg前後で推移したが、4月には800円/kgになり、産卵期の6月には900円/kg



越えとなった。同時に一大産地である愛媛県において大規模な赤潮により出荷抑制がかかり、四国の引き合いが九州にも及んだ結果、九州地区においても品薄が発生し、8月の盆時期には一時1,000円/kgまで高騰した。その後、供給安定した秋口に入り緩やかな下げ基調となった。

2012年末は2kg/尾が900円/kg前後、1.5kg/尾が850

円/kg前後、1.2kgが820円/kg前後で推移した。しかし、年明け出荷魚は赤潮を経験しているためか、運送時や荷受先で斃死するなど評価を低下させる状況が発生している。比較的好調なマダイ価格であるが、ブリ類の安値に同調した価格低下のため、赤潮被害生産者の経営は春先にかけて厳しい状況が懸念される。

## 2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2012年10月からのトラフグ商戦は、過去2年間の高値相場の余韻を引き継ぎ、更に東京都の身欠きフグ解禁を受けての市場拡大期待で強含みのスタートとなった。

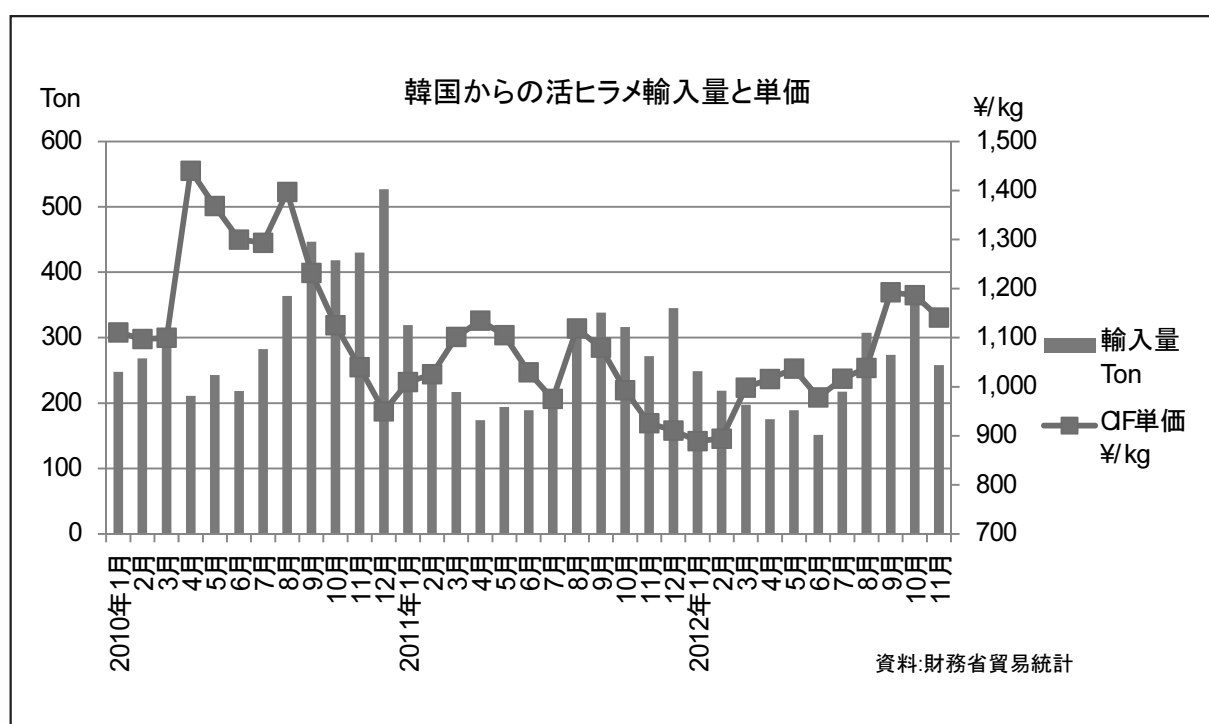
成育面では、梅雨時の赤潮による斃死、夏場の高温での餌止めが続く、全般的に成長は遅れ気味であったが、シュードカリグス症、白点病、ハダムシ等での大量斃死はなく順調に生育した。

9月には加工用としてかなりの量が700g/尾前後で出荷された。生産者の中には、年末までに800~900g/尾で出荷するか、それとも年明け後に1kg/尾upにしてから出荷するか、戸惑う声もある一方で、一部の陸上養殖生産者は11月から1.5kg/尾を出荷した模様である。

9月中旬~10月までは国内の品薄感があり、海面養殖物800g/尾2,800円/kg、キロ物3,000円/kg、陸上養殖物1.2kg/尾3,500円/kgと、昨年同様の浜値でのスタートとなったが、11月上旬には800g/尾が大量に出荷され、浜値も一気にキロ当たり400~500円安となり出荷を見合わせる生産者が出てきた。その後も、東京市場の期待外れ、総選挙期間中の宴会自粛や中国からの相当量の輸入等で下落は続き、一時は2,000円/kgを切る場面もあったが、12月末にはキロ物で2,100円/kgと若干戻した。年明け以降の出荷は1.2kg/尾upでしかも白子入りの要望が多いようである。

越年で3歳魚となるトラフグの在池尾数は長崎県だけでも100万尾とも言われており、今後の価格下落が懸念される場所である。

## 3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目



国内で1kg/尾upの在池尾数が減少していることと、韓国産ヒラメがクドア問題以来市場でやや敬遠されていることにより、9月以降は概ね1,400円/kgの浜値が維持されている。

2012年8~11月の韓国からの輸入ヒラメの平均単価(通関後)は前年同期比で11%上がり1,209円/kgであり、国内相場より200円/kg程度安い。輸入量は4%減の1,192トンであった。

大分県では夏場の高水温による餌止めで成長が遅れ、12月になっても1kg/尾アップが少なく、養殖池が空いていない状況である。

ヒラメ養殖では、夏場の高水温時の飼育、新型レンサ球菌症、エドワジェラ・タルダ症やそれらの合併症等による生残率の低下、出荷魚の小型化による利益の減少で、経営環境としては厳しい状況が続くと思われる。

## 4. ブリ・ハマチ 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪 鮪・鮪

2012年9月1日時点の(社)全海水集計のブリ・ハマチの養殖在池尾数は、当歳魚1,676万尾、2歳魚、1776万尾と前年同月比で当歳魚21%減、2歳魚6%減となっている。当歳魚の大幅な減少は全国的なモジャコ不漁によるものである。2歳魚は赤潮を懸念した売り等もあったが、2011年同様天然物の豊漁のため荷動きが悪くこのような結果となっている。出荷最

盛期である2012年末には浜相場が500円/kgを切り、2011年末よりも生産者の経営環境が厳しい状態にある。

本年魚価は前述のように2011年の導入モジャコ尾数の減少の影響で回復し、生産者の経営が改善することに期待したい。

## 5. カンパチ 間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八

2012年9月1日時点の(社)全海水集計では、カンパチの当歳魚802万尾、2歳魚970万尾と前年同月比で当歳魚10%減、2歳魚4%減となっている。

2011年の後半からの浜値下落傾向に歯止めがかからない状況が現在も続いており、2012年夏季の浜値700円/kgから年末には600円/kg前後と下落し生産意

欲を大きく削ぐ状況となっている。  
現在のカンパチ稚魚状況は、中国での状態が芳しくなく、早期出荷に適した稚魚が少ないようである。それに加えて浜相場安が続いていることもあり、2013年の導入稚魚尾数は前年より大幅に減少するものと思われる。

## 6. ヒラマサ 平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政平政

浜値は、2011年の1,000~1,100円/kgから2012年春には1,300円/kgに回復したものの、刺身商材として高値のヒラマサから安値のカンパチへの移行で、現在900円/kg台となっている。出荷サイズの在池尾数

が多いこともあり、相場の持ち直しには時間がかかるとと思われる。また、主に給餌される生餌も安価に入手できない状況が続いており、他の青物と同様採算面では厳しい状況である。

## 7. シマアジ 縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯縞鰯

2011年は、浜値が1,000~1,050円/kgと低迷したため、値頃感から出荷が進み在池量の減少で2012年春には1,300円/kg、現在は1,400~1,500円/kgまで上がっ

てきている。導入尾数が少なかった2011年の稚魚は268万尾で、その成魚が販売される2013年には好相場が期待できそうである。

## 8. アユ 魚

2012年のアユ生産量等の数量は発表されていないが、引き続き廃業・生産規模縮小で減少傾向に歯止めが掛からない。東京市場への出荷量はほぼ前年並みであったが、平均単価は昨年を下回る相場で推移。大手の生産者では市場出荷が主になり、市場も安定した数量が確保できる大手に頼るといった関係が強化されつつあるが、原発停止による電気代の上昇が経営に大きな影響を与えており、生産者にとっては非常に厳しい状況が続いている。

琵琶湖の特別採捕に先だって滋賀県水産試験場は鮎産卵調査を6次まで行ったが、約7億粒しか確認されなかった。平年値の113億粒を大きく下回り、調査が始まって以来の最低値となった。アユ種苗確保が不安視される中、琵琶湖の特別採捕は前期同様12月1日からスタート。養殖業者からの種苗要望数量は

26.5t。前半は天候不順もあり不漁という現実味を増していたが、その後は安定した採捕が続き、最終的には要望数量を満たしての終漁となった。ただ種苗は全体的に大小差があり、導入後の斃死が止まらないとの事で、今後の歩留まりが心配である。人工種苗は昨年のように遅れは無く、順調に生産しており順次池入れを行っている模様。東北・北関東では原発風評被害から河川放流を減らす傾向にあり今後の動向には注意したい。

今年こそ不況から脱却し、市場価格が上昇する事を期待したいが、円安による燃油・資材の価格上昇も懸念され、コスト増に繋がる危険性がある。そのため生産者は、さらなる歩留まり向上による原価圧縮と、新たな販売ルートの開拓による販売単価上昇の努力を継続して実行していかなければならない。

## 新人紹介

# NEW FACE

太平洋貿易(株)

平成24年9月に入社いたしました手島と申します。

大学は法学部、卒業後は農業及び食品メーカーで勤務し水産業とは無縁であったこともあり、分からないことだらけではありますが、メーカーの方々や上司・先輩方に助けてもらいながら、日々楽しく仕事をしております。

入社して4カ月が経ち、多少は通常業務にも慣れてきたかなといったところではありますが、まだまだ圧倒的に知識不足ですので、長崎大学の海洋サイバネティクス（水産業人材養成プログラム）講習等に参加して意欲的に知識を吸収していく所存です。

これから営業に出るにつれ、皆様に質問する機会も更に増えるかと思っておりますので、その際はよろしくご厚意申し上げます。



てしま たかひろ  
手島 高 廣

2012年9月に入社しました和田です。

大学は商学部、前職は機械営業と畑違いな業界から入社し4か月経過しましたが、まだまだ勉強不足で勉強の毎日です。同期入社の手島君共々、今まで経験してきたことを今後の仕事に生かせる様、一生懸命頑張りたいと思いますのでよろしくお願い致します。



和田 裕一

## 絶滅危惧種ヒナモロコの保護活動

NPO法人ヒナモロコ郷づくりの会  
事務局 大石 敏

### ○ヒナモロコとは？

ヒナモロコは、体長6~7cmになるコイ科の淡水魚です。環境省のRDBで絶滅危惧ⅠA類に指定され(1991年)、日本で一番絶滅の危機に瀕している魚の一つです。国内では九州北部の博多湾に注ぐ河川、有明海湾奥に注ぐ河川の流域の平野部に分布していたとされています。海外では朝鮮半島や中国の東北部に生息しており、氷河期に日本と大陸が陸続きであったことを示す、自然史的にも大変貴重な魚です。国内ではもともと分布域が限られた魚ですが、現在の野生生息地は福岡県久留米市田主丸町の一本の細い農業用水路と圃場整備に伴い新たに創設された「ヒナモロコ水路」のみです。

### ○保護活動の経過

ヒナモロコは1994年に田主丸町の農業用水路で再発見(確認)されました。この時、この用水路を含む水路改修計画があり、緊急避難的に水路から約80尾が捕獲・保護されました。田主丸町(当時)は天然記念物に指定して研究機関や専門機関での保護と増殖の事業を2年間実施しました。また町内に保護団体もいくつか設立され、JAでは「ヒナモロコ米」の販売を目指すなど保護活動は盛り上がりを見せましたが、これらが単独の事業で有機的なつながりに欠けたためか、いつの間にか衰退消滅しました。その後は、再発見前後から中心に関わってきた町起

こしグループ「イーハトーブ耳納の里づくり塾(耳納塾)」だけが保護活動を続ける形になり、1998年にヒナモロコの里親制度を開始しました。2001年にはヒナモロコ里親会として独立し、保護増殖・放流活動を継続しましたが、生息地の拡大には至りませんでした。2010年に新たな活動の展開と展望を図るため「ヒナモロコ郷づくりの会」と改称し2012年にはNPO法人となり、現在に至っています。

ヒナモロコの生息場所は昔ながらの土水路で、水路の幅が0.5~1.2m、長さは約100mです。灌漑期には水田との間をヒナモロコは自由に往来できますが、冬季(非灌漑期)では、用水停止のため、水路の土管部分以外は干上がります。発見当時は、たまたま苗木生産用の散水の流入によって、水位が確保されており、生息が可能となっていたようです。現在は意図的に散水して冬季の水量確保の努力が続けられています。

### ○NPO法人としての目的と活動

会の名前にある「郷づくり」には大きな二つの願いが込められています。その一つは、ヒナモロコをはじめとする水田まわりの生き物たちが安心して生息できる場所をつくること、もう一つは、生息地域で営農・生活をする人たちにとって、安定した暮らしができる故郷をつくることです。

ACN等のご支援を受けて、具体的には、ヒナモロコの種としての保護と遺伝的多様性維持のための

飼育と放流、次代を担う青少年のための環境教育、生息水路の維持・保全と調査、農家と地域支援のための調査・研究等々の活動を実施しています。本年度特に取り組んだ活動として、休耕田を利用して、昔ながらの水田と水路を復元した「水田ビオトープ」を造成しました。ここで、地域の子供達の田植えや稲刈り等の体験や水田・水路の生き物観察会が実施できました。また、このビオトープで得られた知見を基に生息水路保全のために提言ができればと考え

ています。今後の課題は、現在の生息地の不安定さを取り除き、恒久的に保護できる体制を構築することです。そのためには行政や市民を巻き込んでの具体的な郷づくり支援の方策を提言していくことが必要です。

末尾ながら、ACNのご支援に深く感謝するとともに、ACNの益々の発展を祈念しております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



親魚の交換



ヒナモロコの卵



水路等への放流



水生生物の観察会



魚のうろこの観察



ヒナモロコの成魚

—— NPO法人ACNの本年度事業ご案内 ——

## 第15回 ACNフォーラム開催予定

■開催日時：2013年8月20日(火)

■開催場所：アークホテル博多ロイヤル（福岡市）

※詳細等については7月頃案内状発送予定。

◆ACNレポートのバックナンバーは右記URLにてご覧になれます。 <http://www.acn-npo.org/>